

底面マット給水栽培によるキクの採穂親株養成

第1報 栽培法および施肥法の検討

富満龍徳・後藤 哲 (大分県温泉熱花き研究指導センター)

Tatsunori TOMIMITSU and Satoshi GOTOH :

Cultivation of Mother Plant of Chrysanthemum Using Subirrigation

1. Examination on Method of Cultivation and Fertilizer

キクの採穂親株養成における土壤消毒、施肥、灌水の省力化のために、キクの採穂親株栽培への底面マット給水法の適用について検討した。本報では親株の定植方法および施肥法について試験を行った結果を報告する。

1. 材料および方法

品種は“秀芳の力”を用い、底面給水マット上にソイルブロック苗を置き底面から養液を供給する直置き栽培法と、ポットにプロミックスと固型肥料を入れ親株を定植しマット上に置くポット定植栽培法について試験を行った。直置き栽培法では、養液中の硝酸態窒素濃度について、ポット定植栽培法では、肥料の種類および施肥量について、慣行の地床栽培を対照として検討した。

1995年5月18日に挿芽し、親株の定植は5月30日、摘心は6月9日と6月29日の2回行った。ポット栽培法は7月21日に採穂、挿芽し、8月2日から9月1日まで苗冷後、定植する年末電照栽培を行って苗の形質について調査した。

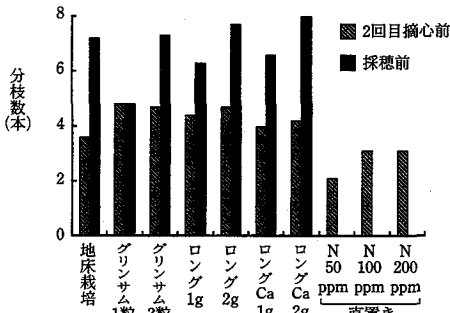
2. 結果および考察

直置き栽培法は肥料濃度が高いほど分枝数、分枝長、葉数が勝ったものの、窒素肥料濃度が高い200ppm区でも地床栽培法より生育が劣り、すべてに鉄欠乏様症状

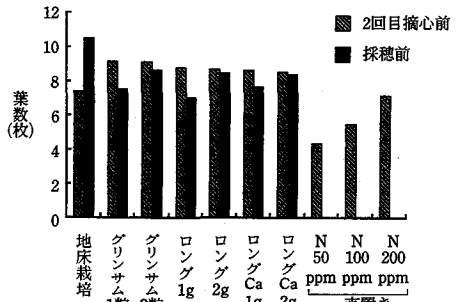
が発生した。なかでも2回目摘心以降の生育は著しく劣った。

ポット定植栽培法では1回目摘心後の生育は分枝数、分枝長、葉数ともすべてで地床栽培法を上回り、その際の施肥量の違いによる影響は小さかった。2回目摘心後の生育は、各肥料とも施肥量の多いほど分枝数、分枝長、葉数とも優ったが、地床栽培法と比べると分枝長および葉数が劣った。ポット定植栽培に供試した肥料の種類ではロング硝カルが2回目摘心後の生育が良く、ロングもほぼ同等であったが、速効性のグリーンサムでは少肥で特に生育が劣った。年末電照栽培時の切花長および切花重は地床栽培法がやや優ったが品質はすべて良好であった。

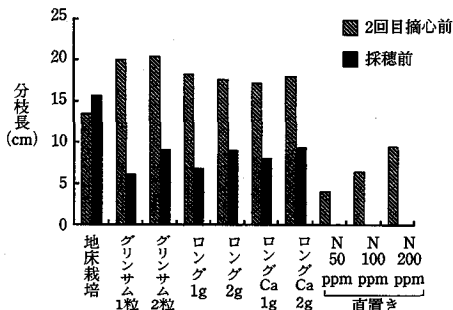
以上のことから、底面マット給水によるキクの親株栽培法は、ポット定植栽培法が良く、肥料では、ロングやロング硝カル等の100日タイプ程度の緩効性肥料が適し、施肥量はポット当たり2gで慣行の地床栽培法とほぼ同等の苗質が確保できた。その際に、灌水の省力とポット内水分を一定に保ち緩効性肥料の溶出を安定させ、肥料分の流亡もなく環境負荷も少ない面から、底面マット給水栽培によるキクの採穂親株養成は有効と考えられた。



第1図 親株栽培における時期別分枝数



第3図 親株栽培における時期別分枝葉数



第2図 親株栽培における時期別分枝長

第1表 年末電照栽培時の切り花の諸形質

試験区名	採花日 (月・日)	切花長 (cm)	切花重 (g)	採花率 (%)
地床栽培	12.25	126	86.7	80.0
グリンサム1粒	12.26	118	78.6	72.5
” 2粒	12.25	119	76.6	80.0
ロング1g	12.25	122	79.7	75.0
” 2g	12.25	121	80.2	77.5
ロングCa1g	12.25	123	75.7	82.5
” 2g	12.25	126	80.4	82.5